

〔清雅なる仏画展によせて〕

玄証本図像再考—自筆本をめぐる—

賢観房玄証(1146~1222)は、覚鑑の弟子である証印に師事し、高野山月上院に住して数多くの白描図像を収集、研究を行った僧侶です。自らも積極的に図像を転写したことが知られます。玄証に関わる白描図像は「玄証本」と称され、伝えられてきました。後に勧修寺を経由して高山寺に納められ、現在は諸家に分蔵されています。多くの場合、玄証の落款や花押、「玄証本」あるいは「月上院」という裏書が認められます。

玄証及び玄証本図像については、戦前から研究がなされてきました。玄証の法脈や経歴については先学によって詳細に説かれていますが、玄証本図像については未だ考察の余地があります。すなわち、数ある玄証本図像の中で、どの図像を玄証自筆本と考えるかという問題です。白描図像は墨線を主体に尊像が描かれるため、玄証本に限らず、いつ頃、誰によって転写されたものなのかを判断することは非常に難しいです。年紀が奥書に記されたとしても、伝領の過程で奥書の由緒が重視され、そのまま転写されることもあります。また、白描図像は多くの場合、図像を引き写すために、油を引いた紙をトレーシングペーパーのように用いるのですが、経年変化の具合や、鑑賞用に表装される際の状況などが異なれば、同じ時代のものでも見た目

の印象は全く異なります。本稿では、玄証自筆の図像について表現の特色を考察し、具体的に作例を挙げたいと思います。

先学によって玄証自筆本と理解されている作品には次の四作品が挙げられます。「曼荼羅集」(大東急記念文庫蔵・図1/奥書:承安三年五月十一日書写比較了 玄証之)、「十六善神図像」(東京国立博物館蔵・図2/治承三年己亥正月十八日模了之 玄証)、「梵天火羅九曜図」(高山寺蔵・図3/文治五年八月廿一日 以別所御本書写了玄証本)、「先徳図像」(東京国立博物館蔵・図4/以勧修寺大納言阿闍梨房御本書写比較了 玄証)です。何れも書写年代及び「書写」「模」などの記述があり、玄証自筆本と見なされています。ところが、四点の図像を比べると、描線の質が異なることが分かります。従って、「梵天火羅九曜図」と「先徳図像」のみを自筆本と見なす見解もあります。

ではなぜ、このような差異が認められるのでしょうか。四点の図像の中では「先徳図像」のみが、肥瘦のあまりない謹直な描線で図像を描き、唇や頬には淡い朱が差されます。江戸時代の転写本である仁和寺本の扉貼紙の記載によると、先徳図像は、小野流の祖である仁海自筆の図像を用いて、弟子の範俊が三国祖師

影供を行ったという由緒が知られ、真言小野流において重要視された図像といえます。手控えとして図像を転写したというよりも、鑑賞されることを視野に入れたものと思われます。一方、他の三点の図像は、「梵天火羅九曜図」に顕著ですが、軽快な筆致で伸びやかに尊像を描いています。三点の間にも描線の弛緩の具合など、表現に差が見出せますが、この振れ幅を玄証自筆の範囲と考えます。このように玄証本図像は、典拠となった図像の性質や転写の目的によって、大きく二種類に分けられます。

両者に共通する描線の特徴を探すと、打ち込み線が目立ちます。先学も指摘するように、筆先を長めに遣す、先端が少しとがった形をしています。では、玄証特有と見なされる打ち込み線と、上記四作例との表現の親近性を手がかりに、玄証自筆図像について探してみたいと思います。出陳される玄証本の内「先徳図像」同様、淡彩・墨彩が施され、觀賞性を意識した作例が「毘沙門天図像」(根津美術館蔵)、「真達羅大将」(個人蔵)、「波夷羅大将」(個人蔵)、「阿弥陀鉤召図」(文化庁蔵)であり、均質な描線で図像を転写する点で「降三世明王図像」・「軍荼利明王図像」(福岡市美術館蔵)も挙げられます。一方、「梵天火羅九曜図」と同じ範疇と見なされる図像は、「伽耶城毘沙門天図像」(個人蔵)、「火頭金剛曼荼羅」・「白衣観音図」(MIHOミュージアム蔵)、「大威徳明王図像」・「毘沙門天図像」・「千手観音二十八部衆図像」

(東京国立博物館蔵)となります。

上記諸作例の内、前者では、「阿弥陀鉤召図」が衣の描線は濃く、肥瘦がある一方、肉身や蓮華茎の毛描きなどの細かな描写は、繊細で謹直な描線が用いられ「先徳図像」と類似します。後者では、下記作品に玄証自筆の可能性を見出せます。「伽耶城毘沙門天図像」は、鎧の墨線など、一部にやや弛緩した描線も認められますが、霊鷲山や夜叉の描写は、簡略な筆致ながらもバランスが良く、筆先を遣した特有の打ち込み線があります。また、毘沙門天及び眷属の足下に描かれた雲の描線は、「梵天火羅九曜図」の羅睺星の涌雲に非常に近いです。「火頭金剛曼荼羅」は描線の肥瘦が強く、軽快に尊像を描き出していますが、類似する描線は「伽耶城毘沙門天図像」の眷属に見出せます。中尊の衣や眷属の肩など、太い墨線が用いられる箇所には筆先を遣す打ち込み線が認められます。特に「十六善神図像」に見られる打ち込みに近いと思われます。

基準となる四点の作品と打ち込み線を手がかりに、玄証自筆と考えられる作例を挙げました。どこまでの範囲を玄証自筆と見なすかは難しい問題です。能筆な玄証は、多様な描線を駆使することが出来ますし、二十代後半から図像の収集を始めているため、個人様式というべき、表現の差異も認められます。また、落款や花押の分析、「高山寺」印の有無など、多角的な視点から検証せねばなりません。

展覧会では所蔵者各位のご協

力のもと、数多くの玄証本図像が出陳されます。実際に、会場で諸作例の描線をじっくり味わって頂ければ幸いです。

(古川攝一)

※図4は『東京国立博物館図版目録:仏画編』東京美術、1987年より複写致しました。

図1

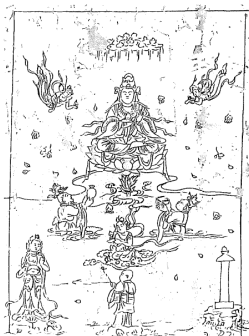


図2



図3



図4



季刊 美のたより No.180

平成24年 10月7日

発行 大和文華館